

国立病院機構熊本医療センター

No.227



くまびょう NEWS

NHO KUMAMOTO MEDICAL CENTER KUMABYO NEWS

発行所
国立病院機構熊本医療センター
〒860-0008
熊本市中央区二の丸1番5号
TEL (096) 353-6501(代)
FAX (096) 325-2519



平成28年熊本地震について 当院及び国立病院機構の対応

このたびの地震により被災された皆様にご心よりお見舞い申し上げます。

今回の平成28年熊本地震は、関東大震災、阪神淡路大震災、東日本大震災と同規模の地震です。当院は、熊本市がおこなう、合同災害訓練に毎年参加し、病院あげでの訓練が行われていましたので、震災当日も、訓練通りの対応が行われました。4月14日午後9時26分の第1回目の震度6強の地震時は、職員スタッフ約350人が集合し、災害対策本部を立ち上げ対応しました。4月16日午前1時25分の2回目の震度7でも、深夜で、自宅の被害や、交通障害などがありましたが、やはり、多くの職員が病院に駆けつけ対応しています。以後は、全職員で、ほとんど不眠不休の対応を行いました。主な対応は、救急外来での患者診療、さらに、震災により入院診療不能となった病院からの転院の受け入れ、透析の受け入れ、さらに県外病院への転送など多岐にわたっています。

第1回目の地震後の翌日、4月15日には、国立病院機構の現地災害対策本部が当院内に置かれ、国立病院機構九州グループが統括し、早速、関門医療センターの初動医療班が駆けつけました。16日の地震以後は、対策本部に機構本部職員が入るとともに九州医療センター、別府医療センター、佐賀病院の初動医療班が駆けつけてくれ、同じ国立病院機構の仲間の早速の援助に、心から感謝すると同時に、大変心強く思いました。これにより、必要物品はすぐに機構から当院に届くようになり、事務職員、看護職員の応援も九州管内の機構病院から多数派遣していただきました。

また、国立病院機構とは別に、長崎労災病院、大阪済生会千里医療センターなど13病院のDMATが、入れ替わり立ち代わり、診療援助に駆けつけ、どれだけ職員が助けられ、元気づけられたか、感謝に耐えられません。

今後は避難所に被災されている人々で、避難生活が長期化することによる疾病が増加することが予想され、通常医療班が必要となります。すでに国立病院機構の医療班は、益城町の総合体育館（ミナテラス）に救護所を置き、被災者の一般診療を行っています。19日現在、福岡病院、嬉野医療センターなど7チームが活動中で、21日からは、福山医療センター、松江医療センター、九州がんセンターが引き継ぐ予定です。東日本大震災の時と同様、国立病院機構は、避難された方のニーズがある限り、最後まで災害時対応として医療班の派遣を続ける予定です。

(院長 河野文夫)

基本理念

最新の知識・医療技術と礼節をもって、
良質で安全な医療を目指します。

運営方針

1. 良質で安全な医療の提供
2. 政策医療の推進
3. 医療連携と救急医療の推進
4. 教育・研修・臨床研究の推進
5. 国際医療協力の推進
6. 健全経営

患者様の権利

1. 良質かつ適切な医療を公平にうける権利があります
2. ご自身の医療について理解しやすい言葉と方法で十分な説明と情報を受ける権利があります
3. 病院から説明と情報を得た上で、自らの意志で治療を受け、あるいは選択し、拒否する権利があります
4. 自分の診療記録の開示を求める権利があります
5. セカンド・オピニオンを求める権利があります
6. 個人としての人格の尊重とプライバシーの保護を受ける権利があります



「県境の診療所」

山口医院 山口 省之・房子

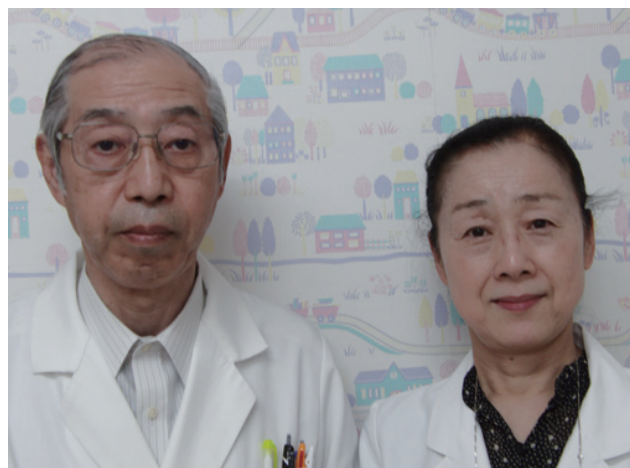
当院は宮崎県との県境に位置し、標高600mの山間地にあります。平成17年、合併により阿蘇郡から上益城郡山都町になりました。一冬に数日は積雪のため外来が休眠状態になります。開業したのは昭和61年4月ですから30年になりますが、江戸時代の初代から数えると10代目の私で約350年になります。

専門は私が婦人科、妻の副院長が小児科です。分娩は出血等緊急例の管理に限界を感じて平成15年に止めました。県境ですので外来患者さんの半数は五ヶ瀬町、高千穂町等の宮崎県の方です。田舎医者のお多分に洩れず、専門外の患者さんの来院も多く、診断困難例や要入院の患者さんは、即高次医療機関にお世話になります。近くに山都町立そよう病院がありますので、多くを頼っていますが、婦人科や小児科の患者さんは市内の公立病院をお願いします。昨年1年間の紹介患者数は総計434例でした。うち小児科144例、その他婦人科を含め290例です。専門

性のなさ故ですが、患者さんから「あそこに行けば適切な病院を紹介してくれる」という評判は得ているようです。

婦人科関係の患者さんは開業当初から長く国立病院のお世話になってきました。特に開業間もない頃、その当時非常に珍しいとされた子宮頸部の悪性腺腫や横紋筋肉腫を徳永達也先生に診断してもらったのは印象深い思い出です。小児科では主にアレルギー関係の患者さんをお願いしています。また最近では精神科にもお願いすることがあり、快い対応に感謝しています。

開業後30年間で山都町の出生数は約4分の1に減りました。当初午後8時までかかっていた小児科外来もインフル等の流行期以外はそこまで遅くなることは無くなりました。30年続けてきて二人とも少々息切れしつつありますが、私は5年間で200例を超した禁煙外来に、妻は子ども達の健康のため、予防接種に力を注ぎつつ、今しばらく地域医療に関わっていくつもりです。



脳死下臓器提供が行われました

2016年3月20日、当院で2例目となる脳死下臓器提供を行いました。ちょうど1年前に経験していたので、当院独自に作成している「脳死判定および臓器提供マニュアル」の改訂版に従い、病院全体が万全の体制で、混乱無く無事に終了することができました。

今回の移植では、心臓、肺、肝臓、腎臓が提供され、すべて順調に経過しているとのこと。患者様のご冥福をお祈り致しますとともに、ご協力頂きました日本臓器移植ネットワーク、熊本県警察本部、熊本県消防保安課、熊本県防災消防航空隊の皆様にご心より感謝申し上げます。

(副院長・救命救急センター長 高橋 毅)



臓器摘出後防災ヘリで搬送の様子

就任のご挨拶



企画課長
むらかみ つかさ
村上 司

4月1日付で長崎医療センターからまいりました村上と申します。平成14年4月から3年間、丁度国立病院が独立行政法人に移行しました平成16年に、熊本医療センターに勤務しており、今回二度目の勤務となります。当時は新しい建物の設計段階であり、正にその業務に関わっておりましたので、自分が実際にその建

物で勤務できることに大変嬉しく思っているところでございます。また、微力ながら一所懸命頑張りますので何卒よろしくお願いたします。

さて、今年度の診療報酬改定は、高度急性期を標榜する病院にとっては非常に厳しい内容となりました。地域包括ケアシステムの推進の他、医療機能の分化・強化と連携の充実を一つの柱として謳っています。このことを踏まえ、当院も「良質で安全な医療」を目指すという基本理念のもと、「24時間365日断らない救急医療」を堅持していかなければならないと考えています。そのためには地域の先生方との連携が何より重要であると思っておりますので、今後ともご指導ご鞭撻の程よろしくお願申し上げます。



副看護部長
なか お
中尾 とよみ

平成28年4月1日付で菊池病院より配置換えで参りました中尾と申します。どうぞよろしくお願致します。菊池病院に在職中は、精神科の患者様を夜間、休日に熊本医療センターに救急搬送した事が何度もあり

ました。「24時間、365日断らない医療」が真に実践されている事を肌で感じておりましたが、新任者研修等で、そこに至るまでの経緯を知り、地域医療連携の重要性とともに急性期総合病院としての役割を再認識しました。

私は、副看護部長としては精神科の経験しかありませんので、急性期の看護管理について学びながら、職責を果たしていきたいと考えております。また、今回、教育・研修の担当となりましたので、研修を通して、地域の皆様とともに医療や看護の質の向上に向けて、情報交換や学びを深める事ができますよう努力して参ります。今後ともどうぞよろしくお願致します。

本年度も臨床研修医を迎えました

今年も元気な新研修医を20名迎えました。研修プログラムごとの内訳では、総合コース15名（定員15）、プライマリケアコース2名（定員2）、歯科コース2名（定員2）、および1年次協力型として熊大Cプログラム1名になります。昨年度は、当院基幹プログラムのうち総合コース2名と歯科コース1名の3名が国家試験に不合格となりましたが、本年度はフルマッチ後全員が国家試験に合格し安堵しています。当院持ち上がりの2年目16名（総合臨床研修コース14名、プライマリケアコース2名）と併せて総勢36名と大所帯になり、現在、医局は大変活気に溢れております。4月1日から約1週間に渡って実施されたオリエンテーションやガイダンス、また各部門別の実習も終了し、現在、各科での研修が開始されたばかりです。新研修医の初々しく率直な振る舞いに、一方で自らを顧みる良い機会にもなっております。当院での研修を希望した皆の期待を裏切らないよう、さらに素晴らしい研修プログラムの構築を目指して



努めて参りたいと思います。

また、本年度も地域密着型の地域医療研修につき、協力施設の先生方をはじめ地域の先生方には厚くお礼申し上げます。医師にとって地域医療は、皆が医師を目指した頃の原点だと思いますし、また、患者に最も身近で接する先生方の医師精神を肌で感じ、研修医が自身の将来像を探す大事な機会になります。いろいろとご面倒をお掛けすることと思っておりますが、ご遠慮無くご指導お願致します。

（教育研修部長 大塚忠弘）

職場紹介

治験センター



治験センターは臨床研究部長を治験センター長とし、薬剤師3名、看護師4名、検査技師1名のCRC（Clinical Research Coordinator）と事務助手2名の多職種からなる部署です。「治験」とは、薬の候補（治験薬）を用いて国の承認を得るためにデータを集める臨床試験のことです。まだ認められていない薬を使うため、治験に参加される患者さまの人権の保護と安全性の確保を図ることは重要です。CRCは、診察に立ち会い、患者さまと医師の間で調整を行ったり、各部署への説明・連絡等を行っております。また、週1回関連部署を交えたミーティングを開催することで、院内での情報共有化を図りながら治験を実施しています。治験は、国内だけにとどまらず、国際共同で実施されるようになってきました。治験の環境の変化に対応しつつ、質の高い治験を実施していきたいと思っておりますので、今後ともご協力をお願いいたします。（治験主任 久保美紀子）

忙しく仕事を終えた後、我が家での癒しはペットです。3家族の愛すべきペットをご紹介します。



りゅうたろう

「りゅうたろう」です。大好物は、甘いもの。嫌いなものは梅干し……。ゆき姉、仕事帰りのお土産忘れないでね。



みみ

「みみ」です。東京から熊本に来て約2年。特技は、ふすま・網戸を開けること。日向ぼっこが趣味です。



ちびちゃん



ぺぺ

にぎやか家族「くー」「ちび」「ぺぺ」です。宮本家の3人の子供たちが一匹ずつ拾ってきました。猫のちびちゃんが一番元気。最近、雄犬なのに「くー」が母親代わりで相手をしてくれます。毎朝の日課は、お姉さん猫の「ぺぺ」とのかけっこです。



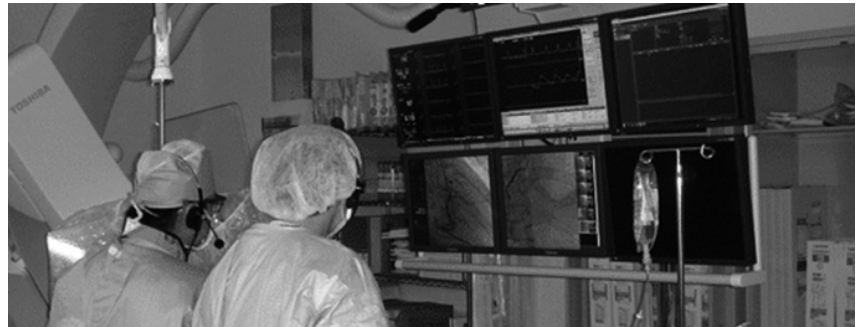
心臓血管センター

心臓血管センターは、「断らない医療」をモットーに、救急医療、病診連携に積極的に取り組んでいます。当科では救急医療に特に力を入れています。急性心筋梗塞、急性心不全、ショック、心肺停止、急性大動脈解離などの重症例に対しても、24時間365日対応できる体制にあります。専門病棟内にCCUを完備し、ヘリやモービルCCUでの受け入れや、救急搬送に対し、共同で診療しています。手術の検討は両者で行い、緊急手術にもスピーディーに対応しています。

《循環器内科》

急性心筋梗塞を対象とした患者様が増えています!!

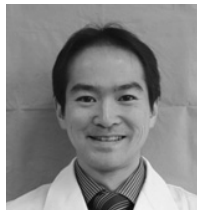
心臓カテーテル検査室が新設された1995年、年間たった1例でしたが、最近では、年間約180例に増加してきました。急性心筋梗塞に対する治療である“経皮的冠動脈形成術”は救急性が高く、一刻を争う処置です。当院では、搬送された患者様に「短時間で、よりスムーズに治療を受けていただきたい」という思いから「救急外来検査処置チーム」を稼働しております。勤務体制は24時間3交代で救急外来に配置し、24時間365日いつでも治療を必要とする患者様の受入ができるような体制を整えています。



部長
ふじもとかずてる
藤本和輝



医長
みやおゆうじ
宮尾雄治



医長
まつかわまさかず
松川将三



医長
まつばらしゅんいち
松原純一



医師
かたやまてつじ
片山哲治



医師
やまだとしひろ
山田敏寛

《心臓血管外科》

我々心臓血管外科も急性心筋梗塞に対し、循環器内科と緊密に協力し合い“経皮的冠動脈形成術”では対応できない症例に対して“緊急冠動脈バイパス術”へとスムーズに行えるようチーム体制に取り組んでいます。さらに弁膜症、胸部大動脈瘤、急性大動脈解離などの心臓大血管手術、及び腹部大動脈瘤や閉塞性動脈硬化症による下肢バイパスなどの末梢血管手術を行なっています。また、胸部大動脈瘤や腹部大動脈瘤の治療は、開胸手術や開腹手術のリスクが高い方などに対し、低侵襲治療である血管内治療（ステントグラフト内挿術）を積極的に取り入れています。



部長
おかもと
岡本 実



医長
たなかむつお
田中睦郎

心電図判読FAX（24時間対応）サービスのご案内

下記FAXにお送り頂いた心電図を専門のスタッフが直ちに判読し、所見をFAXあるいはお電話でお返事いたします。

心電図判読専用FAX

096-354-8533

熊病の歴史

血液内科 第4話 (最終話)

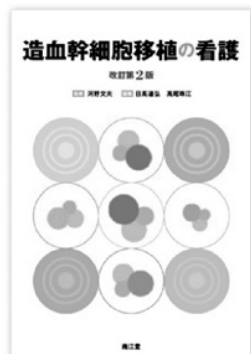
(前回) 2006年同種移植数300例を超え、過去3年の年間平均同種移植数で全国6位にランクされました。

2008年、複数臍帯血移植の開始。熊本第2内科より原田奈穂子医師赴任。原田医師は、大学院生として多発性骨髄腫の研究で博士号取得後、米国バフファロー大学に留学、さらに国立国際医療センターで、大学での研究疾患であった多発性骨髄腫を中心に臨床研究を行い、現在も多発性骨髄腫診療を中心となって行っています。2009年、9月に新病院が完成し、念願の無菌室病棟15床が設置されました。河北敏郎医師、東京大学医科学研究所附属病院へ転出、松井崇浩後期研修医が大阪大学大学院へ転出。河北敏郎医師の後任に熊本大学第2内科より中村美紀医師赴任。2010年、中村美紀医師 国立国際医療研究センターへ転出。レジデント樋口悠介赴任。2011年、スタッフに変動なし。2012年、同種幹細胞移植数500例に達しました。河野文夫、院長に昇任。レジデント樋口悠介転出し、後任に西村直着任。2013年、河北敏郎医師、3年間の東京大学医科学研究所留学より帰任し、東京大学医科学研究所で学んだ臍帯血移植を当院の移植医療に積極的に導入しました。その結果、現在、当科の臍帯血移植の割合が幹細胞移植の中で最も多くなっています。この年、レジデント西村直転出し、スタッフとして熊本大学第2内科より岩永栄作医師が着任。2014年、長倉祥一医師、国立病院機構熊本南病院へ転出。岩永栄作医師が熊本大学第2内科へ帰り、代わりに山口俊一朗医師が着任しました。長倉祥一医師は、パソコンの達人で、当院のクリティカルパスの作成に貢献し、血液内科でも多くのパスを作ってくれました。昨年より、転出先の国

立病院機構熊本南病院副院長として活躍中です。同年、日高道弘部長、高尾珠江看護師長が編集し“造血幹細胞移植の看護”全面改訂版を出版しました。2015年には6南病棟の4床部屋2室を無菌室に改装し、無菌室は合計25床となり6南病棟の半分が無菌室となりました。

2016年4月1日現在、河野文夫院長は院長職に専念し、清川哲志統括診療部長は総合診療内科を担当、武本重毅医師は臨床検査科長となり、3人とも血液内科診療を離れています。そして血液内科のスタッフは、日高道弘血液内科部長のもと、原田奈穂子医長、榮達智(腫瘍内科併任)医長、井上佳子医長、河北敏郎医長、山口俊一朗医長、渡辺美穂レジデントの7人の布陣で伝統を守って骨髄移植を中心とした血液疾患診療に励んでいます。

(院長 河野文夫)



当センターの血液内科病棟に勤務しているスタッフだけで執筆しました。

血液疾患のクリティカルパスも実例を記述しており、2004年1月に発行し、お陰様で2014年に改訂版を刊行しました。



県内唯一の当院骨髄移植センター無菌室病棟25床

国際医療協力「JICA 研修」マレーシア国別

マレーシア保健省により選ばれた12名の研修員が、日本の高齢者医療・ケアを学ぶため、2016年3月7日に来日しました（写真1）。マレーシアの高齢者人口は増加傾向にあり、このためマレーシア保健省は1996年に高齢者を対象とした保健医療制度／サービスを導入しました。そして今、提供する保健医療サービスを「エイジング・イン・プレイス」（高齢者が住み慣れた地域の中で暮らしていけること）の概念に基づいて実践していくことが課題となっています。研修員は、保健省本省もしくは地域医療施設において高齢者への医療・ケアにかかる政策・活動計画立案、事業実施、サービス提供などに携る医師、医師介助職、看護師、作業療法士、理学療法士、ソーシャルワーカー各2名ずつで構成されました。厚生労働省、地方自治体、大学、JICA、そして高齢者に真摯に向き合っている病院・施設の協力を得て、日本の高齢化社会の現状、介護保険



写真1 閉講式直後の記念撮影

制度の概要、そして今取り組まなければならない若者の負担減、労働力減少への対策などについて理解し、リハビリや認知症予防への取組みを学びました（写真2、3）。そして4月1日に帰国した研修員は、全員が一つのチームとなり、マレーシアのこれからの保健医療政策・施策を担っていくこととなります（写真4）。

（臨床検査科長 武本重毅）



写真2 熊本機能病院にて



写真3 青磁野リハビリテーション病院にて



写真4 熊本医療センターヘリポートにて

臨床研修修了式が行われました

平成28年3月18日、お世話になった指導目の前で基幹型研修を受けた医科17名、歯科2名の臨床研修修了式が行われ、河野院長より一人一人に臨床研修修了証が授与されました。研修開始時は、まだ学生のような初々しかった研修医も、1年あるいは2年間の当院での研修で鍛えられ、自信に満ちあふれた医師に成長していました。これは本人たちの努力もさることながら、地



臨床研修修了証を持って記念撮影

域医療の研修先として研修医を指導して頂いた協力病院の先生方や、患者様を送って貴重な症例を経験させて頂いた連携医の先生方のお陰であり、心から感謝申し上げます。

夜は研修修了祝賀会を行い、院長からの記念品などを贈呈して、研修の修了と新しい門出にふさわしい楽しい会となりました。当院で学んだことを忘れずに、更に成長して立派な医師となるよう願っています。

（臨床研修科長 原田正公）



臨床研修修了授与式の様子

いま、国立病院機構
熊本医療センターで
何が研究されているか

シリーズ103回

血清CD30レベルが表すと考えられる成人T細胞白血病細胞活性化ならびにその血管外遊走

臨床検査科 藤崎 恵

【はじめに】

成人T細胞白血病・リンパ腫（ATL）は九州に多い疾患ということが知られています。その原因であるヒトT白血病ウイルス1型（HTLV-1）感染から発症までは60年という長い年月を必要とし、35年にもわたる研究が続いていますが、未だにその発症・進展・増悪に関して不明な点が多いです。

我々は、ATLなど成熟T細胞腫瘍によるCD30発現の意義を明らかにすることを目的に、10年前より当院で治療したATL患者の残血清を保存し、その可溶性CD30（sCD30）の測定を開始しました。

【対象と方法】

2005年から2010年の間に、当院で初回治療を行ったATL患者から同意を得て、生化学検査で使用後の残血清を凍結保存して用いました。血清sCD30については、eBioscience社製のKitを用いて測定を行いました。

【結果】

血清sCD30は、末梢血中の腫瘍細胞数と相関を認めました（ $\rho=0.456$ 、 $P=0.009$ ）。末梢血中ATL細胞数5%で2群に分けると、バイオマーカーとして既に用いられているsIL-2Rよりも有意差があることがわかりました。また肺病変（非腫瘍性を含む）に着目してみると、症例数は少ないものの、肺病変のある患者ならびに末梢血中ATL細胞数の多い患者でsCD30レベルが高い傾向を認めました。

【考察】

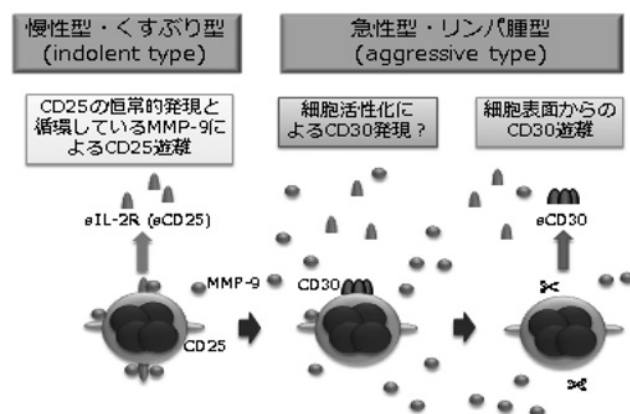
ATL患者血清でsCD30の上昇が認められ、バイオマーカーとしての有用性が示されました。血清sIL-2Rの上昇と比較して、sCD30上昇がみられる症例では、末梢血中に腫瘍細胞の出現を認めました。

また、肺浸潤を伴い急性転化した症例で臨床像の出現前からsCD30の上昇を認めており、今回の解析で肺病変のない2症例でsCD30高値を示した理由は、末梢血中に腫瘍細胞が出現していたためと考えられました。

CD30はサイトカイン受容体の一種で、その発現はT細胞の活性化状態を表すといわれており、ATLのindolent typeでは発現しておらず、aggressive typeで認められます（図1）。サイトカイン受容体の遊離には酵素が関与しており、 α disintegrin and metalloproteinase（ADAM）10とADAM17がsCD30産生に携わります。最近の報告によれば、ATL患者の血漿中sCD44が有意に上昇しており、その発現は全身状態、浸潤部位の総数、LD値などに関連がありました。これらの結果よりCD44もATL発症・進展・重症度のマーカーになりえると考えられました。CD44もCD30同様、ADAM10ならびにADAM17のはたらきにより細胞表面から遊離することが知られています。すなわちATL患者でみられるsCD30上昇はATL細胞上のADAM10ならびにADAM17の活性化に伴う結果であり、これらはCD44と共にATL細胞の接着・遊走・浸潤にはたらいていると考えられました。

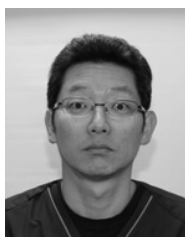
【結語】

血清sCD30上昇は、成熟T細胞腫瘍の活性化状態のみならず、血管外遊走・組織浸潤している腫瘍細胞の存在を表している可能性があります。



（図1）慢性型（くすぶり型）から急性型・リンパ腫型への進展過程で認められるCD30発現と可溶性CD30レベル上昇

新任職員紹介



消化器内科医長
うらた まさゆき
浦田 昌幸

平成28年4月より消化器内科で勤務させていただくこととなりました浦田昌幸と申します。平成9年に熊本大学第3内科に入局後、八代総合病院（現 熊本総合病院）、国立熊本

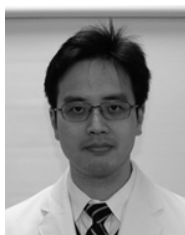
院（現 当院）、水俣市立総合医療センター、熊本再春荘病院、熊本総合病院で消化器内科医として勤務させていただきました。当院は平成11、12年に消化器内科レジデントとしてお世話になった事があり、16年ぶりの勤務となります。病院も新しく建て変わっており、赴任が決まり大変緊張しておりますが、当時お世話になった先生方が現在も各科でご活躍されているのを知って、心強く感じている次第です。ESD等の内視鏡治療・検査を中心に、消化器内科全般の診療を通じて、少しでも当院のお力になればと考えております。皆様、何卒よろしくお願い致します。



神経内科医長
ひらばら ともお
平原 智雄

平成28年4月より勤務させて頂くこととなりました神経内科平原と申します。

平成11年卒で18年目になります。これまでは熊本大学付属病院の勤務が長く、一昨年より熊本赤十字病院に勤務しておりました。脳梗塞治療は現在大きな転換期にあります。カテーテルによる血栓除去術の有効性が明らかとなり、より効果的に閉塞血管の再開通が得られるようになりました。当院では実施できませんが、市内の脳卒中センターと協力体制を構築しております。脳梗塞を中心に、神経難病、頻度の高い頭痛、髄膜炎、てんかんなど幅広く、迅速に対応したいと思っております。よろしくお願い致します。



呼吸器内科医長
おの ひろし
小野 宏

本年4月より呼吸器内科で勤務させて頂くことになりました小野宏（おのひろし）と申します。平成13年に佐賀医科大学

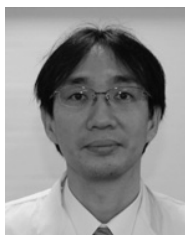
学を卒業し、東京築地にあります聖路加国際病院で研修を開始し、呼吸器内科・感染症科シニアレジデントとして両分野で研鑽を積んで参りました。その後、平成20年より東京医科歯科大学呼吸器内科大学院へ進学し、肺癌に関して研究。以後、埼玉県春日部市の秀和総合病院で呼吸器内科医長として勤務して参りました。多岐に渡る疾患を扱う当科であり、全領域対応させて頂きませんが、主に呼吸器感染症診療を強みとしています。皆様との連携を大切に、誠心誠意御紹介頂きました患者様の診療に取り組んで参る所存です。何卒宜しくお願い申し上げます。



皮膚科医長
じょうの たかみつ
城野 剛充

このたび熊本医療センター皮膚科に配属されました城野剛充と申します。前任は熊本大学医学部附属病院でした。同院では3年間集中治療部にも在職しておりました。皮膚科的な

疾患としては皮膚リンパ腫を中心に、手術症例等も手広く診療しておりましたので、今後も同様に診療していければと思っております。私は10数年前、まだ当時の古い建物で、国立熊本病院の時代ですが本院で働いておりました。その頃とは雰囲気もだいぶ変わって新鮮な気持ちでまた仕事ができるのを楽しみしております。皮膚悪性腫瘍や皮膚リンパ腫だけではなく、全身管理を必要とする患者様等、どんな方でもご紹介いただけましたら誠心誠意対応させていただく所存です。若輩者ではございますが、熊本の医療の質の向上に少しでも役に立てたらと気を引き締めている次第です。どうぞよろしくお願い致します。



神経内科医長
にし しんすけ
西 晋輔

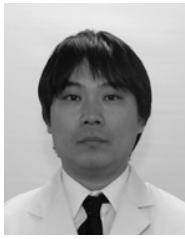
平成28年4月より神経内科にて勤務させて頂く西と申しま

す。これまで熊本大学附属病院、済生会熊本病院、熊本再春荘病院と勤務した後、前回当院で2年間勤務させていただき、その後熊本労災病院で勤務し、5年ぶりに再びこの病院へ戻ってくるようになりました。

当院は熊本の救急医療を支える重要な病院であり、当科では脳卒中やけいれん発作、脳炎・髄膜炎などの救急を要する疾患を中心に対応して参ります。

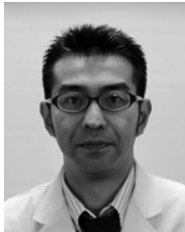
これから地域の皆様の御役に立てる様に頑張りたいと思っておりますので、どうぞ宜しくお願い致します。

新任職員紹介



循環器内科医長
かたやま てつじ
片山 哲治

本年4月より、循環器内科に異動となりました片山哲治と申します。日本で有数の救急病院で勤務できることに、期待と不安の気持ちでいっぱいです。1日でも早く業務に慣れ、患者様、地域の先生方、病院にお役に立てるよう精一勤務して参りますので、よろしくお願い申し上げます。



糖尿病・内分泌内科医長
きのした ひろゆき
木下 博之

熊本大学代謝内科より参りました木下と申します。平成19年に入局後、平成22年に大学院に進学し、大学院卒業後は熊本大学病院にて診療を行ってまいりました。患者様の気持ちに寄り添って丁寧に正確な診療を心掛けていきたいと思っております。至らぬ点も多く、皆様にご迷惑をおかけすることもあるかもしれませんが、研鑽を積み精一杯頑張っていきます。ご指導、ご鞭撻よろしくお願いいたします。



外科医長
し かぎ ひろのぶ
志垣 博信

皆様、はじめまして。平成28年4月1日より外科で勤務させていただきます、志垣博信と申します。平成20年に熊本大学消化器外科に入局し、主に消化管癌を中心に診療してきました。癌に対する治療は手術、抗がん剤治療、放射線治療を組み合わせた集学的治療が重要となっており、患者さんに最適の治療を提供できるように、多職種と連携を取りながらチーム一丸となって診療にあたります。また、熊本医療センターの特徴である外科緊急手術にも積極的に対応していきます。これからよろしくお願い致します。



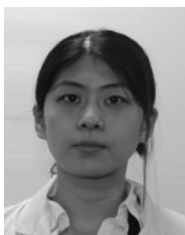
救命救急科
た なか ひろみち
田中 拓道

皆様初めまして。救急部の田中拓道（ひろみち）と申します。

福岡大学卒業後、熊本大学プログラムでの初期研修、福岡徳洲会病院救急部での後期レジデント期間を経て、昨年4月から熊本大学救急部で勤務、このたび当院救急部での勤務をさせていただくことになりました。

熊本でも有数の救急搬送件数を誇る当院で地域の救急医療に少しでも貢献できればと考えております。

何卒ご指導・ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

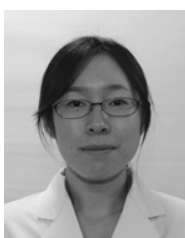


麻酔科
たけなが まゆ
竹永 真由

研修を終えた後、熊本大学麻酔科へ入局しました。熊本大学附属病院、済生会熊本病院に勤務し、周術期管理を主に修練を行ってきました。熊本医療センターは重要な中核病院の一つであり、救急外来も盛んな病院ということで、不安もありますが、ここでしか積めない、様々な経験ができるのではないかと期待しております。

まだ未熟で修練を積んでいる身ではありますが、熊本の地域医療に少しでも貢献できるようがんばりたいと考えております。よろしくお願いいたします。

平成28年4月1日より、麻酔科で勤務させて頂く竹永真由と申します。2012年に熊本大学を卒業し、市中の病院で初期



麻酔科
もりなが まや
森永 真矢

4月から麻酔科で勤務させて頂くことになりました、麻酔科の森永真矢と申します。

平成25年に熊本大学を卒業後、熊本中央病院で2年間の初期研修を経て昨年熊本大学麻酔科に入局致しました。まだまだ勉強中の身で、ご迷惑をおかけすることも多々あると思っておりますが、少しでも熊本医療センターに貢献できるよう精一杯頑張りたいと思っておりますので、ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い致します。

研修のご案内

第208回 月曜会（無料） （内科症例検討会） 〔日本医師会生涯教育講座1.5単位認定〕

日時▶平成28年5月16日(月)19:00~20:30
場所▶国立病院機構熊本医療センター研修室2

1. 内科症例検討 診療で遭遇した興味ある症例の検討を行います
「第1症例 高齢者のネフローゼ」
国立病院機構熊本医療センター腎臓内科 尾上友朗
「第2症例 倦怠感への対応」
国立病院機構熊本医療センター腫瘍内科医長 磯部博隆
2. ミニレクチャー「ランニングは体に良いのか」
国立病院機構熊本医療センター循環器内科医長 松川将三

日頃、疑問の症例、興味のある症例、X線、心電図、その他がございましたら、ご持参いただきますようお願い致します。

〔問合せ先〕国立病院機構熊本医療センター統括診療部長 清川 哲志 TEL:096-353-6501(代表) FAX:096-325-2519

第176回 三木会（無料） （糖尿病、脂質異常症、高血圧を語る会） 〔日本医師会生涯教育講座1.5単位認定〕 〔日本糖尿病療養指導士認定更新のための研修単位<2群>0.5単位認定〕

日時▶平成28年5月19日(木)19:00~20:45
場所▶国立病院機構熊本医療センター研修室2

1. 「当院における糖尿病教育入院の実際と課題」
国立病院機構熊本医療センター 病棟看護師 坂本みなみ
2. 「糖尿病治療最近の話題」
熊本中央病院 内分泌代謝科 部長 西田健朗 先生

なお、興味のある症例、疑問・質問のある症例がございましたら、お持ちいただきますようお願い致します。

〔問合せ先〕国立病院機構熊本医療センター糖尿病・内分泌内科部長 西川 武志 TEL 096-353-6501(代表)内線5441

第61回 症状・疾患別シリーズ（会員制） 〔日本医師会生涯教育講座2.5単位認定〕

日時▶平成28年5月21日(土)15:00~17:30
場所▶国立病院機構熊本医療センター地域医療研修センター

座長：たしま外科内科医院 院長 田嶋 哲 先生

演題：「血管疾患」

1. 末梢血管疾患の診断と治療 国立病院機構熊本医療センター循環器内科部長 藤本和輝
2. 大血管疾患の診断と治療 国立病院機構熊本医療センター心臓血管外科部長 岡本 実

この講座は有料で、年間10回を1シリーズ（年会費10,000円）として会費制で運営しています。但し、1回だけの参加を希望される場合は1回会費2,000円で参加いただけます。

〔問合せ先〕国立病院機構熊本医療センター 地域医療研修センター事務局

TEL 096-353-6501(代表)内線2630 096-353-3515(直通) FAX 096-352-5025(直通)

第146回 救急症例検討会

日時▶平成28年5月25日(水)18:30~20:00
場所▶国立病院機構熊本医療センター地域医療研修センター

テーマ「小児科救急疾患」

国立病院機構熊本医療センター小児科部長 高木一孝

医師、薬剤師、看護師、放射線技師、臨床検査技師、栄養士、救急隊員、事務部門等全職種が参加できます。多数のご参加を歓迎します。

〔問合せ先〕国立病院機構熊本医療センター 地域医療研修センター事務局 TEL 096-353-6501(代表)内線2630 096-353-3515(直通)

※今回の震災により研修日程の変更等が発生する場合がございます。ご了承下さい。

2016年 研修日程表 5月

国立病院機構熊本医療センター 地域医療研修センター

5月	研修センターホール	研 修 室
1日(日)		
2日(月)		
3日(火)		
4日(水)		
5日(木)		
6日(金)		
7日(土)	12:30~17:00 第9回 熊本PEECコース	
8日(日)		
9日(月)		
10日(火)		
11日(水)	18:00~19:30 第98回 国立病院機構熊本医療センター クリティカルバス研究会(公開)	
12日(木)	7:30~8:15 二の丸モーニングセミナー 18:30~20:00 熊本県臨床衛生検査技師会一般検査研究班月例会	
13日(金)		15:30~16:45 肝臓病教室(研2) 「肝臓について」
14日(土)	8:30~12:00 新人看護師技術研修 ~楽しく学ぶ基本のき~	
15日(日)		
16日(月)		19:00~20:30 第208回 月曜会(内科症例検討会)(研2) [日本医師会生涯教育講座1.5単位認定]
17日(火)	19:30~20:30 第45回 熊本摂食・嚥下リハビリテーション研究会 「義歯と摂食嚥下について」 くまもと温石病院歯科医師 川上剛司 ゆみこ歯科クリニック院長 町田由美子	
18日(水)	19:00~20:30 第122回 総合症例検討会(CPC) [日本医師会生涯教育講座1.5単位認定]	
19日(木)	7:30~8:15 二の丸モーニングセミナー 14:00~15:00 第38回 市民公開講座 「膝の疾患について」 国立病院機構熊本医療センター整形外科医長 福元哲也	19:00~20:45 第176回 三木会(研2) (糖尿病、脂質異常症、高血圧を語る会) [日本医師会生涯教育講座1.5単位認定] [日本糖尿病療養指導士認定更新のための研修単位<2群>0.5単位認定]
20日(金)	19:00~20:30 第39回 熊本がんフォーラム	
21日(土)	15:00~17:30 第61回 症状・疾患別シリーズ 「血管疾患」 [日本医師会生涯教育講座2単位認定] 座長 たしま外科内科医院 院長 田嶋 哲 1. 末梢血管疾患の診断と治療 国立病院機構熊本医療センター循環器内科部長 藤本和輝 2. 大血管疾患の診断と治療 国立病院機構熊本医療センター心臓血管外科部長 岡本 実	
22日(日)		
23日(月)		
24日(火)	18:30~20:30 血液研究班月例会	19:00~21:00 小児科火曜会(研1)
25日(水)	18:30~20:00 第146回 救急症例検討会 「小児科救急疾患」	
26日(木)	7:30~8:15 二の丸モーニングセミナー	19:00~21:00 熊本脳神経疾患懇話会(研2)
27日(金)		
28日(土)	9:00~17:00 第94回 救急蘇生法講座 ~二の丸ICLSコース~ 講師 国立病院機構熊本医療センター救命救急科医長 原田正公 ほか	
29日(日)		
30日(月)		
31日(火)		

研1~3 2階研修室1~3

※二の丸モーニングセミナーにつきまして、詳細はホームページ(<http://www.nho-kumamoto.jp/>)をご参照ください。

問い合わせ先 〒860-0008 熊本市中央区二の丸1番5号 国立病院機構熊本医療センター2階 地域医療研修センター TEL 096-353-6501(代) 内線2630 096-353-3515(直通)

※今回の震災により研修日程の変更等が発生する場合がございます。ご了承下さい。